



お仕置き執行人マリノ
～寸止め地獄のお仕置き～

晴華（はるか）は生徒会室のカーテンを開け、眼下に広がる庭園を眺める。手入れの行き届いた庭園の先では、学生寮が夕焼けを浴びて光っている。

晴華は思う。自分には生徒会長として、この美しい女学園の秩序を守る責任がある。それなのに。

晴華は「はぁ…」と溜息を落とす。

「また、この学園を穢すような生徒が出てしまいました」

副会長も「本当に残念です」と溢し、晴華に一枚の報告書を手渡す。

「三年 F 組、楠井望（くすいのぞみ）。20XX 年〇月△日、学園敷地内で男性と密会していたことを確認」

晴華は報告書を読み上げると、もう一度深く溜息を吐いた。

「お仕置き制度を設けても、風紀を乱す生徒は次々と出てくるんですね…」

この全寮制の女学園には『お仕置き執行人』という役職・制度が設けられている。学園内の風紀を乱す生

徒をお仕置きで更生させるという制度。しかしそれでも、風紀を乱す生徒は一定数存在する。

「仕方ありません、さっさと終わらせましょう」

「はい。望さんは今、寮の自室にいることを確認しています」

「分かりました、では行きましょうか」

晴華を筆頭に、生徒会役員たちが部屋を出ていく。

お仕置きが行われたのはその日の夜。生徒会役員たちによって、楠井望がお仕置き部屋へと連行されてくる。マリノはすでに部屋の中にいた。

お仕置き執行人マリノ。外部より招聘された、お仕置きのプロ。

「マリノさん。こちらが今夜のお仕置き対象者です。三年F組、楠井望。お仕置き理由はすでに連絡してある通りです。お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

晴華が望を事務的に引き渡し、生徒会一同は部屋を

出る。

マリノは望の前に立ち、指で顎を上げさせる。

「男性と会ってたんですってね」

「はい…でも、誰にも迷惑はかけてません！」

「そういう問題ではないのですよ。迷惑さえかけなければルールを破ってもいい、そういう考えの人がいると、收拾がつかなくなってしまうです」

望はまだ何か言いたそうだったが、マリノの視線に射すくめられ、声が出ない。

「分かりますか？ いえ、分からなくても構いません。そういう人を正すために、私がいるんですから」

マリノの口が望の耳元に寄る。

「お仕置き開始です。まずは服を脱いでください」

『お仕置き執行人』の制度が始まってから、何度かお仕置きの場面を見る機会もあった。合気道の達人であるマリノに対して抵抗が意味をなさないこと。抵抗すればするほどお仕置きのレベルが上がること。これらはすでに周知の事実だった。

容赦のないお仕置き。それが今から、自分の身に降りかかってくる。

望は身震いしながら、ゆっくりと服を脱いでいく。
「会っていた男性は彼氏ですか？」

下着姿になった望が、腕で胸元を隠しながら「違います」と答える。

「彼氏でもない男性とわざわざ学園内で会うなんて、相当遊んでいらっしゃるようですね？」

望はこの質問には答えなかったが、マリノは特にそれ以上は問い詰めなかった。

(いずれ分かることですから…)

心の中でそれだけを呟く。

望は下着も脱ぎ去り、お仕置き部屋の淡い照明の中に裸体が晒される。

「よくできました。さて、今回のお仕置きは、男好きのあなたにぴったりのものを用意しました」

マリノは棚の中から一本のディルドを取り出し、宣言する。

「三年 F 組、楠井望。お仕置き理由、学園敷地内における男性との密会。お仕置き内容、寸止め地獄。お仕置きレベルは 3 です」

「レベル、3…」

1 から 5 までであるお仕置きのレベルのうち、望がこれまで目にしたレベルは 1 と 2 だけ。それでも相当過激な内容だった。

マリノは望の背後に回り、指や舌で体を愛撫し始める。耳、首筋、脇腹、乳房…。ディルドはまだ使わない。あくまで優しく、望の体に快楽を蓄積していくようにゆっくりと撫でまわす。

「んっ…」

望の吐息が漏れ始めたのを合図に、マリノの手が下のほうに滑っていく。太もものつけ根を撫で、クリトリスにも僅かに触れる。

「あんっ…」

「可愛い声を出すんですね。その声でたくさんの男性を興奮させてきたんですか？」

「違います…んっ…」

焦らすようなマリノの手つきに、望の腰がくねり始める。

「そろそろ欲しくなってきましたか？」

望は無意識に、傍らに置かれたディルドを見る。男性器を模したおもちゃが自分の中に入ってくるところを想像してしまう。

じゅわ…

秘部が熱を持ち、湿り気を帯びてくる。マリノが望の秘部をなぞると、指先で蜜が糸を引いた。

「やっぱり欲しいみたいです」

望は顔を背けるように俯く。そんな望の耳に、意外なほどあっさり「いいですよ」という声が落ちてきた。

マリノはディルドを手に取り、先端を望の秘部に押し当てる。

「では、いきますよ」

そう言って、ズブズブと望の中に押し込んでいく。

「んあぁっ！」

先端が奥まで到達したところで動きを止める。

「よかったですね、欲しかったんでしょ？」

「くうっ…んんっ…」

「喘ぎ声でお返事をするなんて、いやらしい子ですね」

マリノの言葉で望の腰がくねくねと動き始める。その瞬間。

「ダメですよ」

忠告とともにマリノはディルドを引き抜く。

「勝手に気持ちよくなるなんて許しません。これはお仕置きなんですから」

マリノはそう言って、指先で体を弄り始める。乳首を転がし、クリトリスを撫でながら、首筋に吐息を吹きかける。

望の体がピクピクと震え始めたところで、またディルドを挿入。

「んんんっ！」

しかし、一突きだけしてすぐに引き抜く。ディルドを抜かれた望の腰が無意識に前後に動く。

「どうしたんですか？ 腰が動いていますよ？」

望の頭の中で、理性が徐々に掠れていく。

一突きされては引き抜かれ、全身を愛撫される。その繰り返し。愛液がすでに太ももを伝っている。

脚が震え、膝が崩れかける。

「もう立てませんか？」

マリノは聞きながら、ディルドを一突きする。しかし、今度はそれで終わらなかった。二突き、三突き。

「くううう……んああああ！」

散々焦らされた望の体から、快楽が喘ぎ声となって飛び出す。子宮口を何度も突かれ、望の体が快楽に震える。

「あ、あんっ、んんっ！イ、イク…」

望が無意識に腰を突き出したのを見て、マリノはディルドを引き抜く。

「イカせるわけないでしょ？」

望は膝から崩れ落ち、物欲しそうに上目遣いでマリノを見る。

※体験版はここまでとなります。

続きは本編でお楽しみいただけると幸いです。